

**Q 16** 道徳の評価はどのようにすればよいのですか。

－ポイント16－

- 児童生徒の道徳性については、常にその実態を把握して指導に生かすよう努める必要がある
- 道徳の評価は、教師と児童生徒の温かな人間関係に基づいて、共感的に理解されるべきもの
- 道徳の時間に関しては、数値などによる評価は行わない

学習指導要領には、「児童（生徒）の道徳性については、常にその実態を把握して指導に生かすよう努める必要がある」と示されています。一人一人の児童生徒の道徳性が道徳教育の目標や内容を窓口として、どのように成長したかを明らかにするよう努め、指導計画や指導方法を評価し、その結果を指導の改善に生かすことが求められます。

## 1 道徳教育における評価の意義

道徳教育における評価は、教師が児童生徒の人間的な成長を見守り、児童生徒自身が自己のよりよい生き方を求めていく努力を評価し、それを勇気付ける働きをもつものです。それは、客観的な理解の対象とされるのではなく、教師と児童生徒の温かな人格的な触れ合いやカウンセリング・マインドに基づいて、共感的に理解されるべきものです。特に、中学校においては、生徒自身による自己評価を生かして、新たな目標への努力を支援することが大切です。

## 2 道徳性の理解と評価

### （1）評価の基本的態度

道徳性は、児童生徒の人格全体に関わり、人間性が表れたものであるため、その理解や評価については、極めて慎重な態度が求められます。いくつかの調査の結果を過信して、児童生徒の道徳性を客観的に理解し評価し得たかのように思い込むことは厳に慎むべきものです。

評価に当たっては、常に児童生徒の立場に立って児童生徒を受容し尊重する共感的な理解を心掛けるとともに、児童生徒の道徳的な成長の姿を温かく見守り、よさを認め励ましていく教師の姿勢が大切です。

あくまでも道徳性の評価は、児童生徒が自己の生き方や人間としての生き方についての自覚を深め、人間としてよりよく成長していくことを支えるためのものです。

### （2）評価の観点と方法

児童生徒の道徳性の理解と評価に当たっては、指導との関連から、道徳的心

情、道徳的判断力、道徳的意欲と態度及び道徳的習慣について分析することが多いです。

評価の方法については、決められた方法があるわけではありませんが、次のような方法が考えられます。

- |              |                      |
|--------------|----------------------|
| ○ 観察や会話による方法 | ○ 面接による方法            |
| ○ 質問紙などによる方法 | ○ 作文やノートなどの記述による方法 等 |

これらの方法には一長一短があるので、それぞれの特徴を押さえ、その都度適切な方法を生かしたり、いくつかの方法を併用したりすることなどが必要です。

### 3 道徳の時間の評価

道徳の時間の評価については、学習指導要領に「道徳の時間に関して数値などによる評価は行わないものとする」と示されています。これは、道徳性は、人格の全体に関わるものであり、数値などによって不用意に評価してはならないためです。

評価の具体的な考え方や方法については、学習指導要領や解説には示されていませんが、学習指導の改善や個に応じた指導の充実を図るためには、1時間の指導についての評価は必要不可欠です。したがって、道徳の時間においては、可能な限り、児童生徒の心の動きの変化などを様々な方法で捉え、それらを日常の指導や個別指導に生かすとともに、教師自らの指導を評価し、指導方法などの改善に努めることが大切です。

例えば、次のような考え方と方法で道徳の時間の評価をすることが考えられます。

道徳の時間の目標は「道徳的実践力の育成」の育成です。したがって、道徳の時間の評価は、児童生徒に道徳的実践力が育成されたかどうかを評価しなければなりません。しかし、道徳的実践力は、将来出会うであろう様々な場面等において、道徳的価値を実現できるための内面的な資質であり、計画的、発展的な指導により、徐々に養われるものです。だから、1時間の指導で育成されたかどうか（～な心情が育ったか、～な態度が育ったか など）を評価することは極めて困難です。

そこで、道徳的実践力を育成するために行う「道徳的価値の自覚を深める」学習を評価の視点とし、一人一人の児童生徒が「道徳的価値の自覚を深める」学習ができたかどうかを評価します。具体的には、道徳的価値の自覚を深める指導を行うための指導の手だてに対して、期待する児童生徒の学びの姿を想定します。その期待する児童生徒の学びの姿が評価の観点となって、実際の児童生徒の学習の様子を評価します。

例えば、道徳的価値のよさを理解させる（道徳的価値の自覚を深める）ために、中心場面における主人公の気持ちを、児童生徒一人一人が自己との関わりで考えられるような発問の工夫(指導の手だて)を考えます。その場合、期待する児童生徒の学びの姿は「主人公の気持ちを自分との関わりで考え、道徳的価値のよさに気付く」ことであり、これが評価の観点となって、主人公の気持ちを、自分の体験やそのときに抱いた思いなどを基に考えているかどうかを評価します。